

700
8/4
889

曾我物語





五郎時致
頼朝公の
庭前より
遠く衆を
感ぜしむ





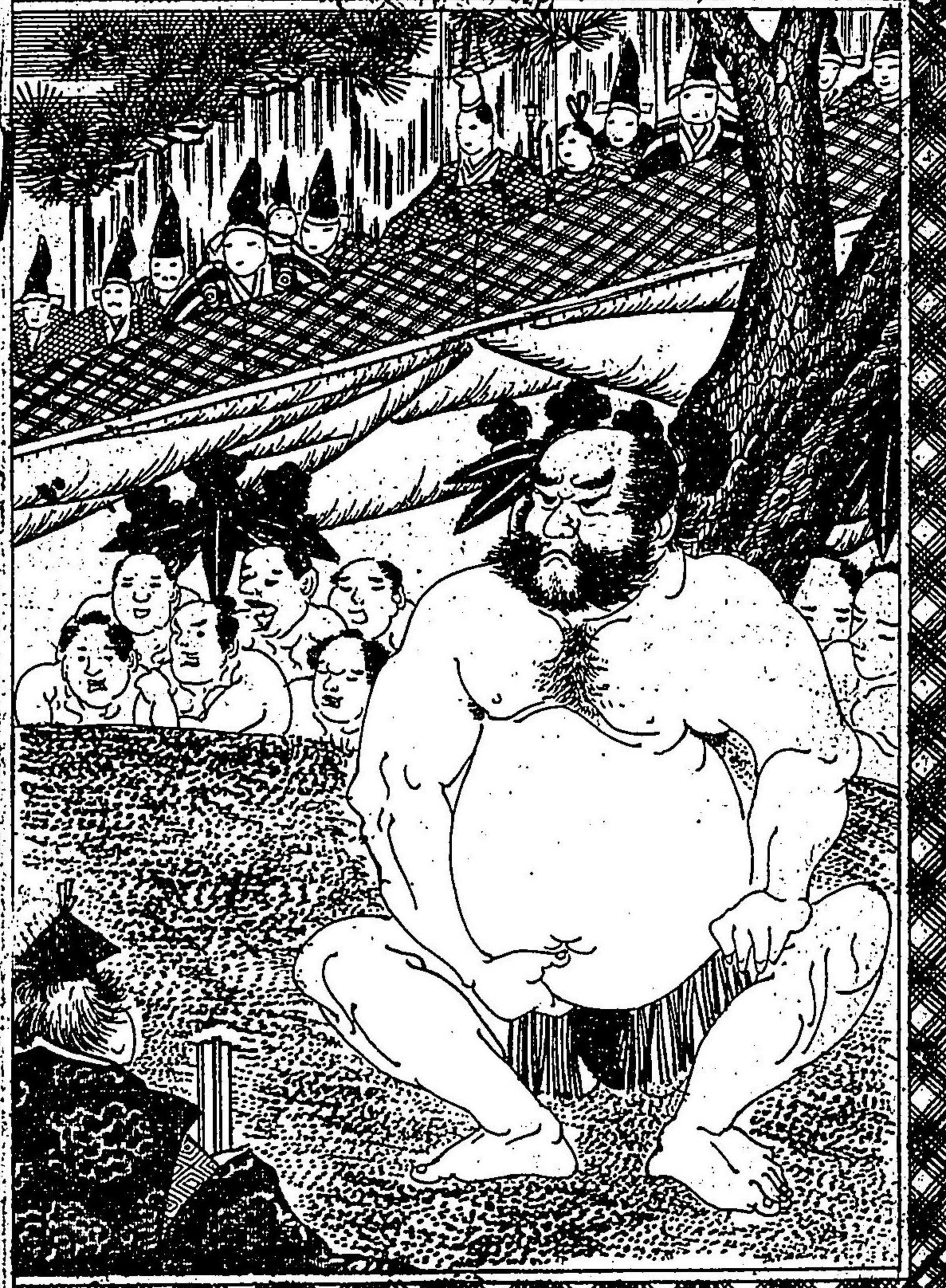
五郎時致
頼朝公の
庭前より
遠く衆を
感ぜしむ

特52
164

河津三郎
保野五郎
ニ勝チ名
ヲ後世ニ
揚ク



№14960



圖始 俊は伊豆国伊東守
佐義郡河津の三ヶ庄
の領主四郎大夫
家継二男の子



△あり嫡男
祐家が家督を為せ
べきのところ継母
の計らひみ
次男祐繼を相続させし
るその頃武蔵大藏谷の
郷に帯刀先生義賢が義との
領地を犯せしは義朝怒つて
その子源大義平を以て
義賢を討し其時

祐繼、義平は
従ひ大藏



の谷へむらひ勇戦し
失傷を受帰郷せしが
其傷痛みて重病となり
未期よ及び先非を悔み兄
祐家の子祐親へ家督を返し
譲り一子金石丸幼少故後見を頼
て死去す是よよつて祐親家督
を金石丸年十五まで元服し工藤
祐經と号し京師に在るを
致し然るま祐繼は我家押領せし
思ひたが六波羅を小松内府重盛公へ其
訴ふ内府は双方を召登りて申条を聞し
めされ内府が各断しよつて祐繼非かちちて
祐親上首尾よつて帰くなしけるか元是

祐親の父祐家と親子もさ家督相續おすべからず
 継母の斗ひよて終に三度は家督をうかまされけるが事
 ども諸事分明に判決ありしなるが祐親くや一
 事を思ひてひそかに伊豆下向し祐親をつけねらふ事
 づんぎを得ずなよつて三島在ま住む近江
 小森太い旧臣八幡三郎といふ者のうらへ尋
 行き今般の次を物をかりし所領の仇
 あるべき祐親をうしなせんと思ふを
 よろしく助力を頼み交とどけれを兩人
 均しく詞をそろへ免角彼が他出をつけ
 ねらひ討取て恐らざるをうしなせいらせん
 承引なしてぞ窺は祐親をねらい様子を伺ひて
 いりりたるが祐親は流入右兵衛佐頼朝
 をなまめんと河津三郎祐泰も斗りて
 安元二年十月八日伊豆の赤沢山のたくの
 野は狩獵をもよほし九日はうりを止め



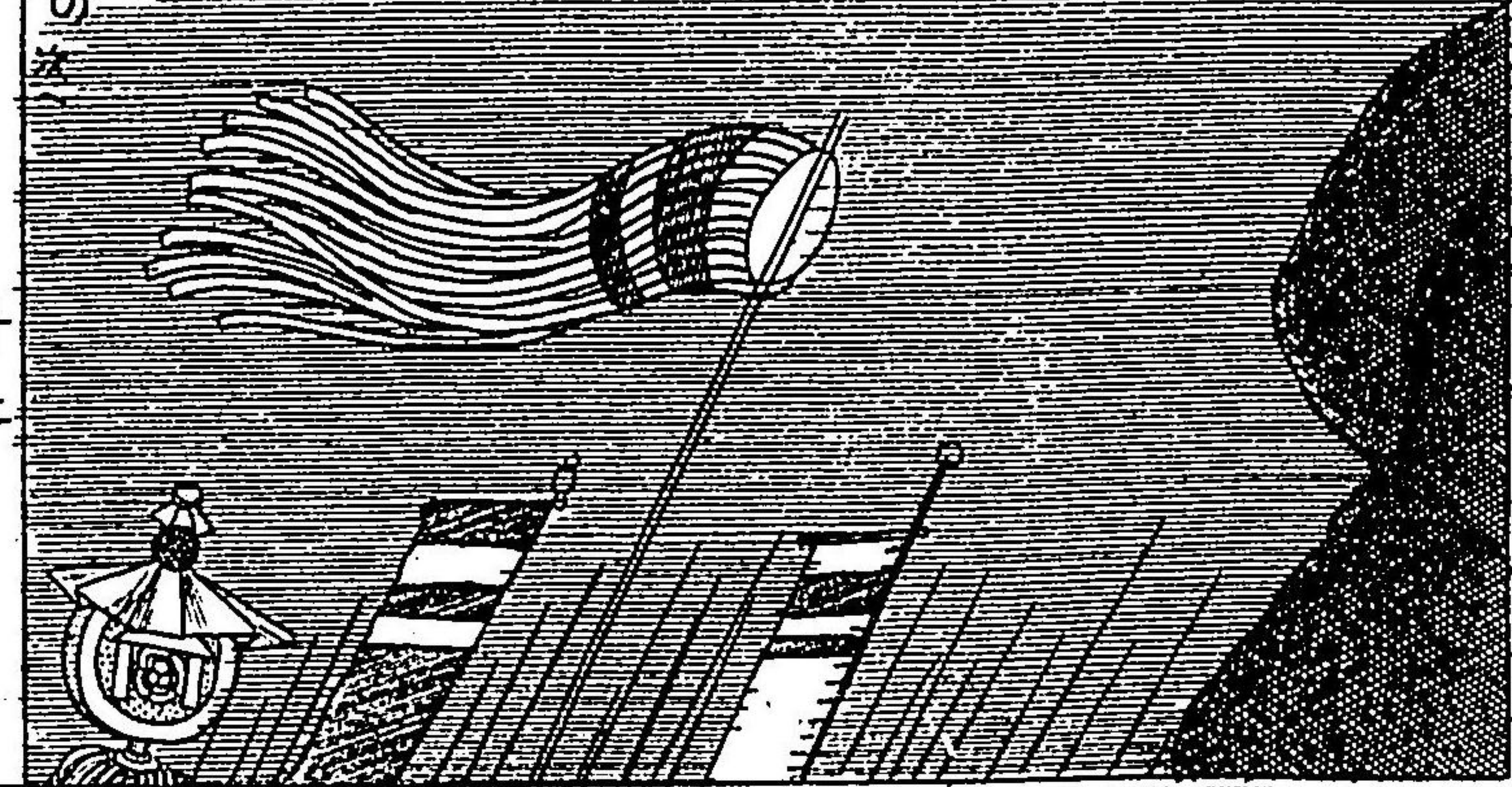
しかたなれたる
 若とのあまうち
 寄りて相横の
 勝負をあらふ
 そひるが其中
 は伊野五郎
 景久十二人
 勝をとり合は
 相手よあるべきもの
 なきはなありし折り
 祐親の嫡子河津三
 郎祐泰いできり伊野
 は勝を得りける今よ
 どりしまで河津が手
 四十八表裏力士の内よ其
 名のこれりとぞ





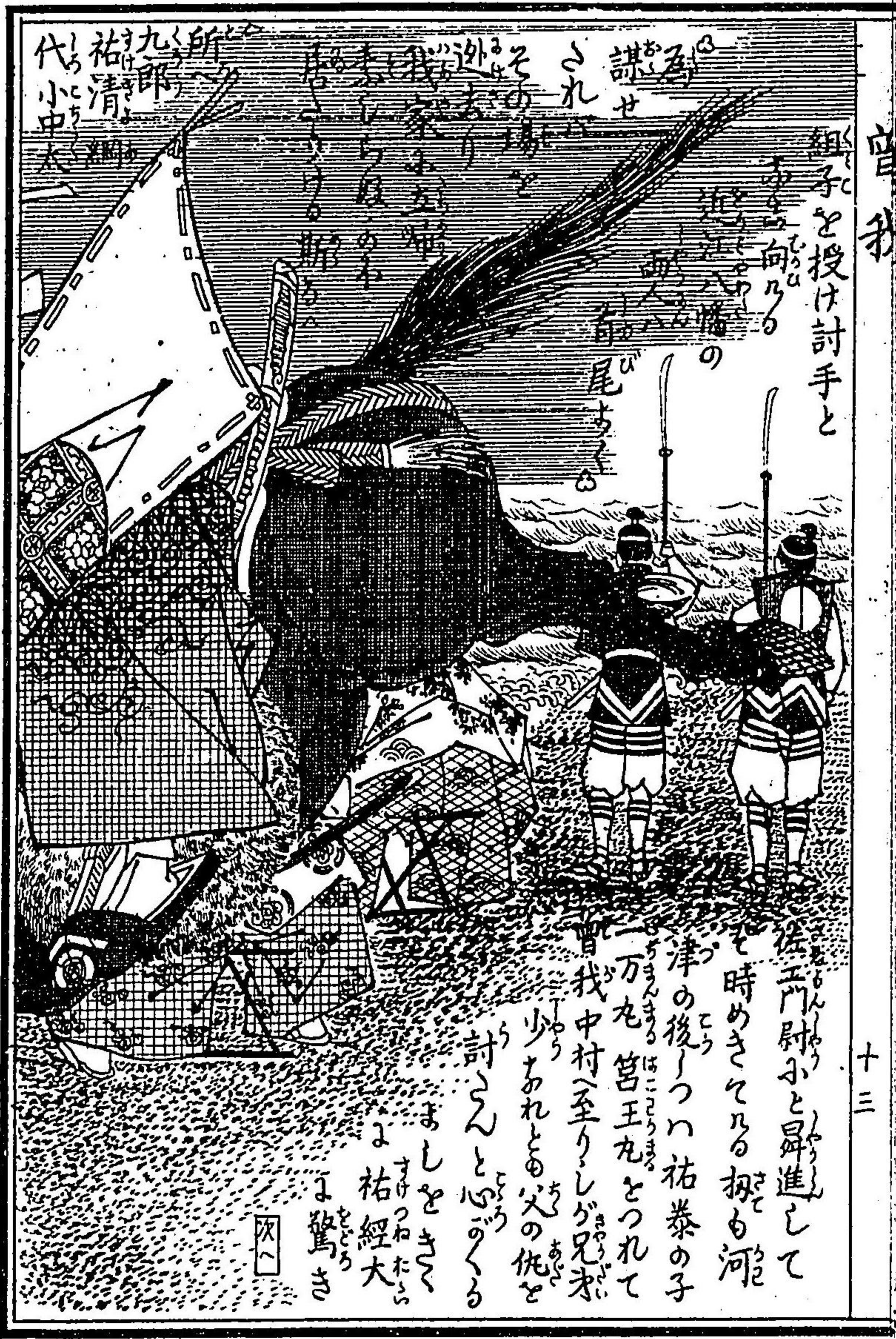
下山のしんくをぞ
あしはるが 近江八幡

頼みぞうけしを果さば時ありと弓矢をとりて
赤沢山へ到りて祐親を窺ふともよきひま
ある然らば帰り道を狙げせんと赤沢山の
推の木三あんげの蔭に身を潜せし今や
とまらぬけり斯くとも知らぬ若殿とちり
びく下山を後陣より通ふるなり祐親
ときりて放せを冤錯せ矢は河津三郎が
射よりそれ狼藉とせんごの人々驚き騒ぎ祐
恭をみ抱おせを眼をひらき彼方より近江八幡の
兩人々木うげを見られ正しく彼れらも祐親の
頼まれたる仕業あふんと言ひたれりさすが勇猛の
祐恭おれど大事の深手まだまらず果敢あらも
一命を終りひら父祐親の嘆き言人があし却て
祐親ハ祐恭を射る二人を生捕来しと次男の
九郎祐清及二郎從綱代小中太の兩人は各々三十人づの



百一

十二



謀に
これ
逃れ
我が
所
九郎
祐清
代
小中

曾利

細子を授け討手と

十三

法門尉と鼻進して
時めきける柳も河
津の後つひ祐恭の子
一丸宮王丸とつれて
曾我中村に至りしが兄弟
少なれとも父の仇を
討さんと心づく

ましとまき
は祐經大
は驚き



親の命
運兵
たり
と下
ま
とれ
ハ
期
さ
ら
働
つ
然

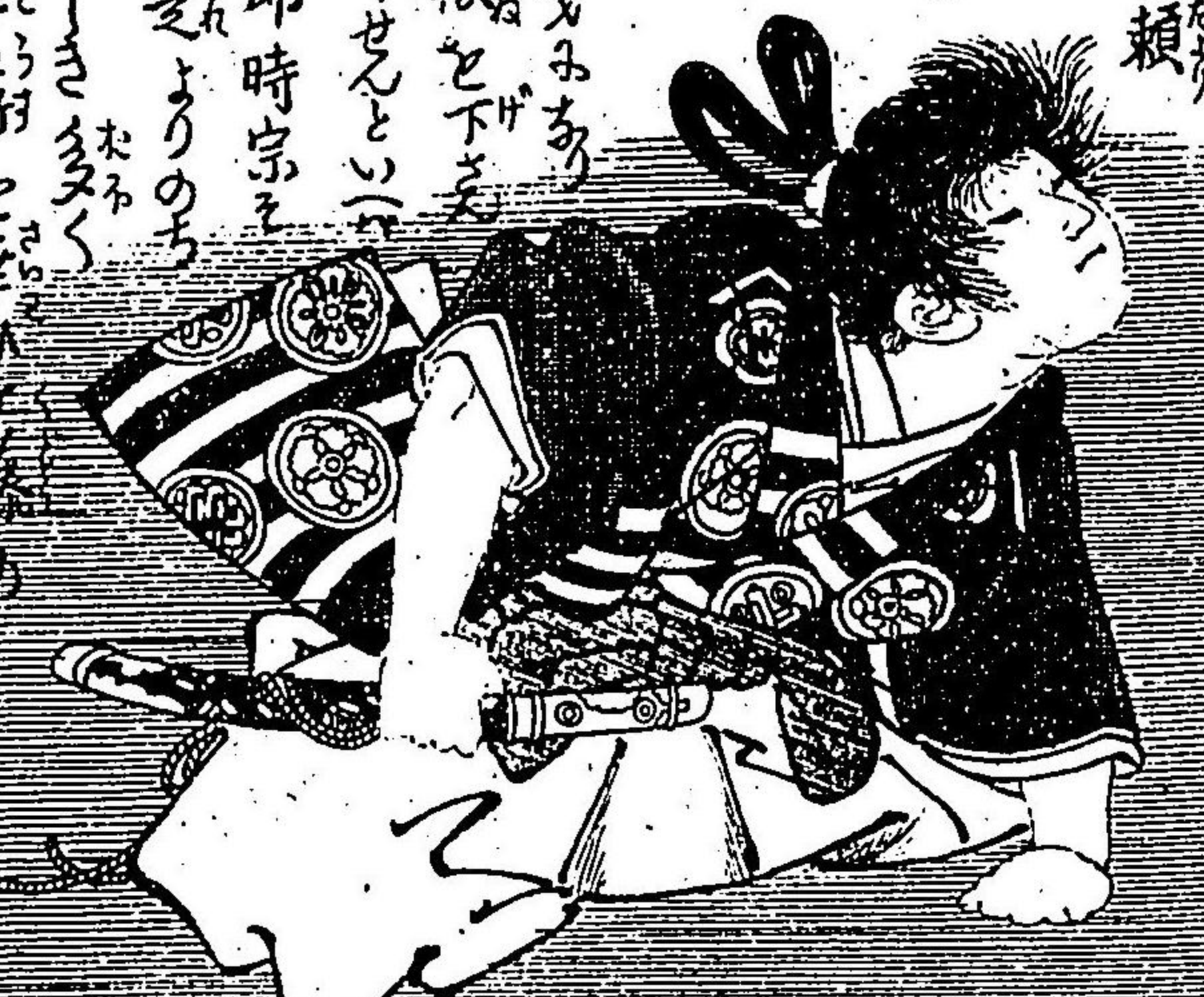
十四

十四



心やからず何とぞ彼の兄弟を失なへんと様々
 は諺言とあり彼の兄弟は幼少あれども祐親の孫の
 由あれを生ねるゝ後の為
 ようとさるべきといひけるまぞ
 竟は頼朝公一人おたま
 兄弟を召させ將は斬らん
 と由井が演よご引
 かくしてまをた
 処を
 畠
 山重忠
 是を安身よとて
 助命を乞ひしを畠山の
 旧功さめんと兄弟の命を
 助けて祐信を許へどくしなる
 是重忠が仁心よする所あり去程よ

一万九百十三天まで元服ふし曾我十郎祐成
 と名のりけるまは箱王丸は 昔堤の益は出家せん
 箱根の別当行実と頼とてとさんさせり時頼
 朝公権現一糸詣の折工藤も御ともありしが
 箱王丸は祐経をさしころんとひまを伺ひ
 各は祐経見付て招かよせ甘言をもつて
 説きとし引でものありとて赤木の柄の
 短刀をよへりり是よりいり仇うち念
 あわさらんあり其後別当は箱王丸早十七夜あり
 かねを剃髪させんとあすは其夜箱王箱根を下さ
 し曾我へ入り兄祐成は始終をくろ元ぶくせんといひ
 兄祐成北條鳥帽子親よこの元服させ五郎時宗を
 名のりる母は是をききて五郎を勘当あり是よりのち
 建久二年三月四鎌倉は大火し大小名の屋しき多く
 せうらうは其騒は紛れ曾我兄弟は家の手前を幸ひ
 飯屋へ伺ひるるをエネ藤の良後八幡七郎み見とめられとり



兄才新美折々朝比奈三郎とあり合せ七郎を
 たらして兄弟を救ひ此処をたてさせざる板建人
 七月頼朝公征夷大将軍に任せられなるより
 拜賀として諸国の大小名鎌倉へさんし
 ある諸士の別当和田義盛も一族をつれ大磯
 まふ来りしが其夜長う許は泊あし
 遊君をあつめ酒宴をもやうしなるは枯
 成が来り合ふよし幸ひと招き義盛
 盃と虎序前へさす虎も其盃を
 成へさすは一同なきやうもて既
 駈きはあぶんとすこのとき五郎
 の兄の身の上をあぶり裡馬もち
 うち来り障子の外はたす
 て内の容子を伺ひたると其くげ
 鬼神の如くありけれを朝比奈三郎障子
 とあり跡容此方へ入るとまへと五郎のふさ



つゝん座敷へいざんとするを五郎いひ
 争ひしは互の力は草摺うりと扱れ
 三郎あともけは倒るるよそ五
 郎微笑しく内へ入りけり一座の人
 是を見て両雄の力量を感賞し
 ろむくもやぶるなり相今般
 頼朝公大小名さんしらせし
 幸ひあれを富士野と巻狩あさん
 と夫々奉行を定め陳宮成就
 せしよし諸大名へ出陳仰付
 られ五月廿日御出馬や
 觸出さるる曾我兄弟是
 きく仇討の時せり此な
 ありと先十郎母の暇をわひ
 小袖とうけつきて五郎の勘
 枯板がとんちを以て免るるれ



同じく小袖とていひて其の情を
謝して富野の事にしては
頼朝公は官軍の事そのまゝ五月廿五日
早天より諸士八方入馬をば各々手柄
をあらんと争ひ多くの戦ひの行出せしは
よそ右大将は最御興入り在田四郎へ
大猪を仕止め工藤祐経の手負ひ座を
追かけ来るを兄弟天のまゝと工藤光と
切り放さんせしすまゝ工藤祐経のひかり兄弟を
そく大方ならす翌廿八日と五月雨めいり降
られを狩をとめ一同体息あしよる兄弟今日の
雨こそ幸ひあり工藤の飯屋へ忍び入本意を
彼が飯のやうを見覚へたんと祐成一人工藤の飯屋
前を徘徊あまて父と見止めりれ呼入れ
祐成は舞ふついの内の子と思はれり
時致は斯くと知らぬ其の

十九
る斯て
兄弟は今
は思ひま
すあると
いさ討入の装
ひせんと雄々
出立夜の更をま
ちうて工藤の飯
屋へ忍び入しが祐
経早もさつじえん
野所あらねを
わかれよと
さ外へ
天と

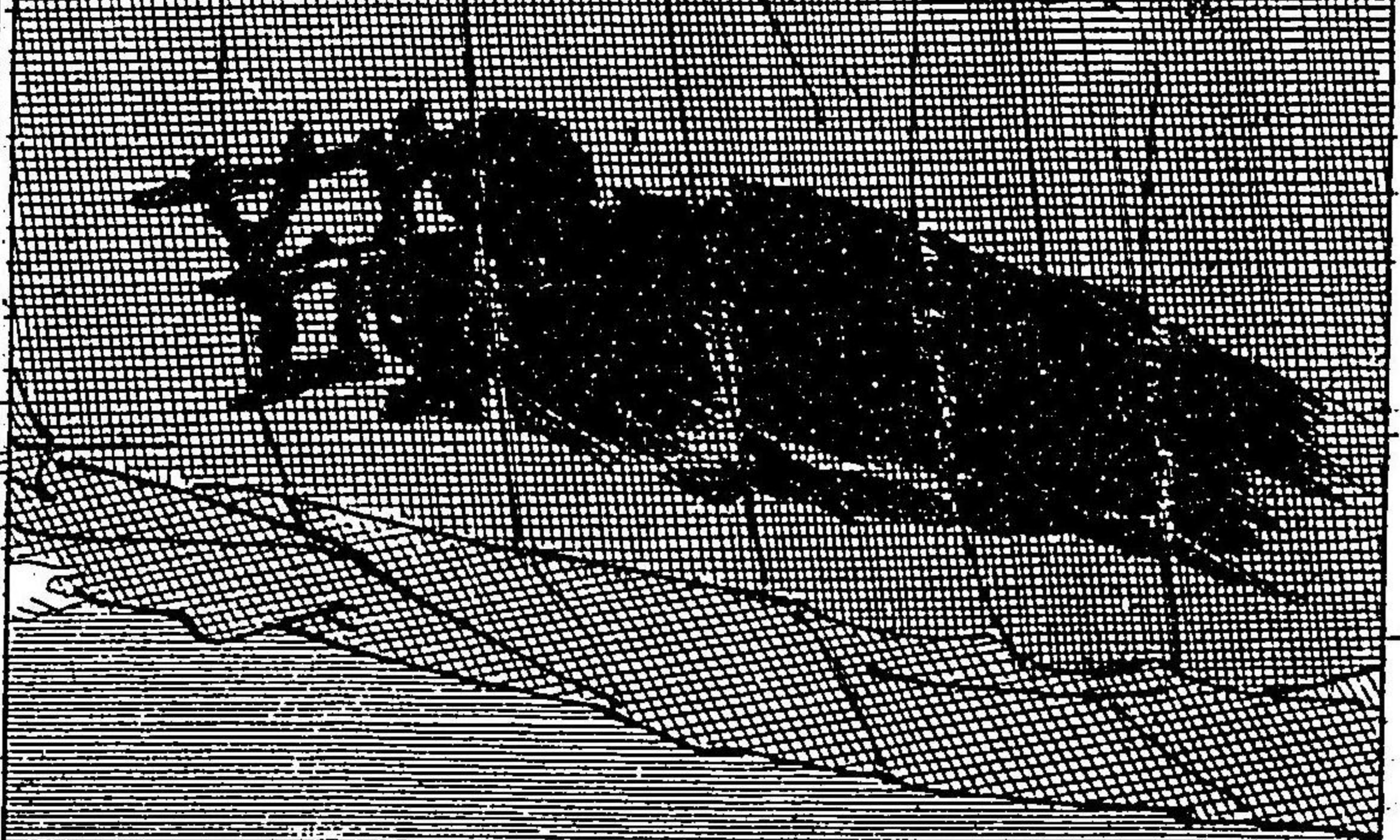


支那のへく来し鬼王道
三郎と招き母を来し一連の
書と認めし管へ来し神を
添つて是は母上りまのち
せん馬と鞍は曾
我の春つれ
矢は放し
取らぬか
おりの記念
れをとく曾我
へ持ちかへりて
を二人はとく詩
入の供せんと
免るられ
詮が
村へ入り

廿



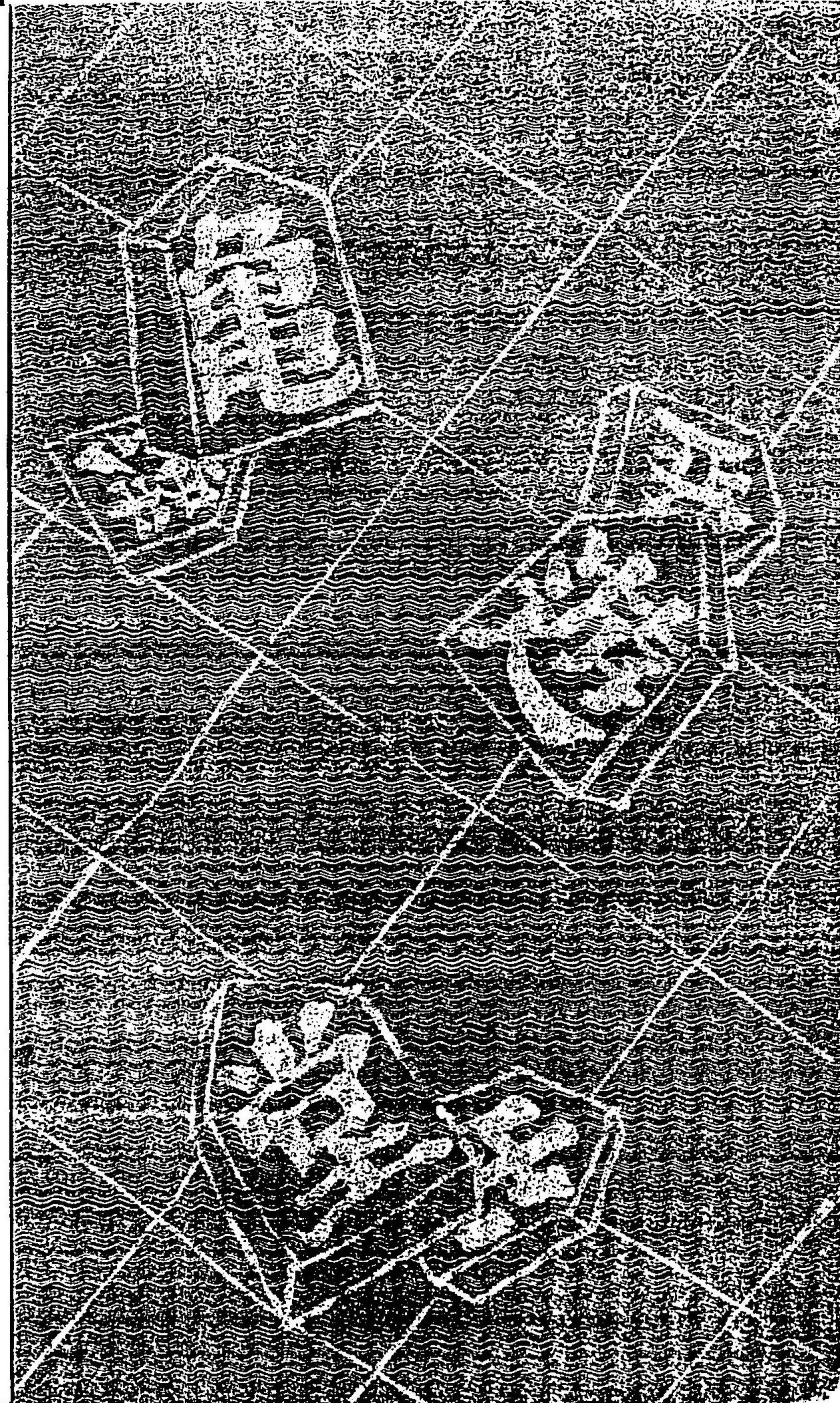
仰き嘆き居りその折り留山
 良党本田清郎夜まより出米
 兄弟とむらよこれらる体と見て
 ま思ひ波よちらる沖の船考ふ
 は此方をと工藤が脚指さし
 てを立ちあがるよ兄弟は
 あらひ其とこころへ
 見れを果して祐
 遊女と共に即居り
 兄弟の声を立て側
 森入し者を斬る死
 と切るも同様と呼起し
 うけて工藤の起んとまる
 斬倒し父が怨をもち
 喜ひる兄弟今切死せんと
 外面のがいで

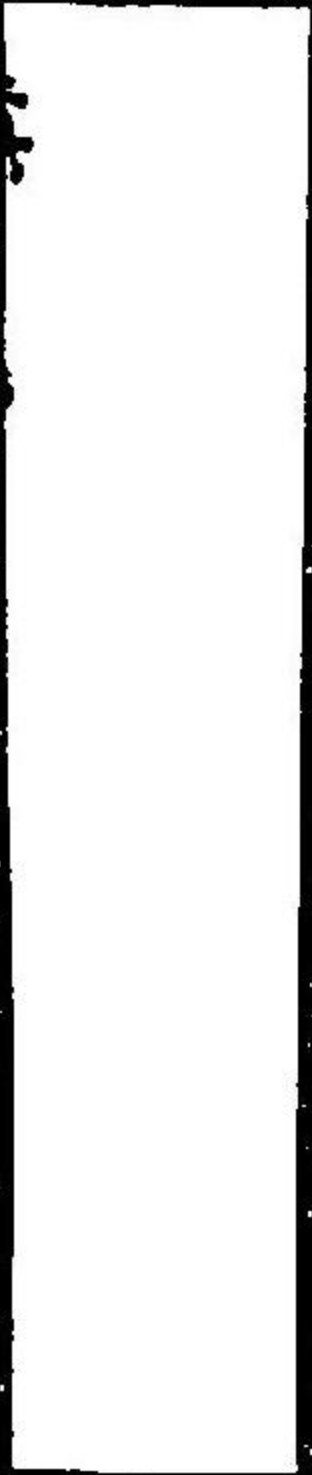
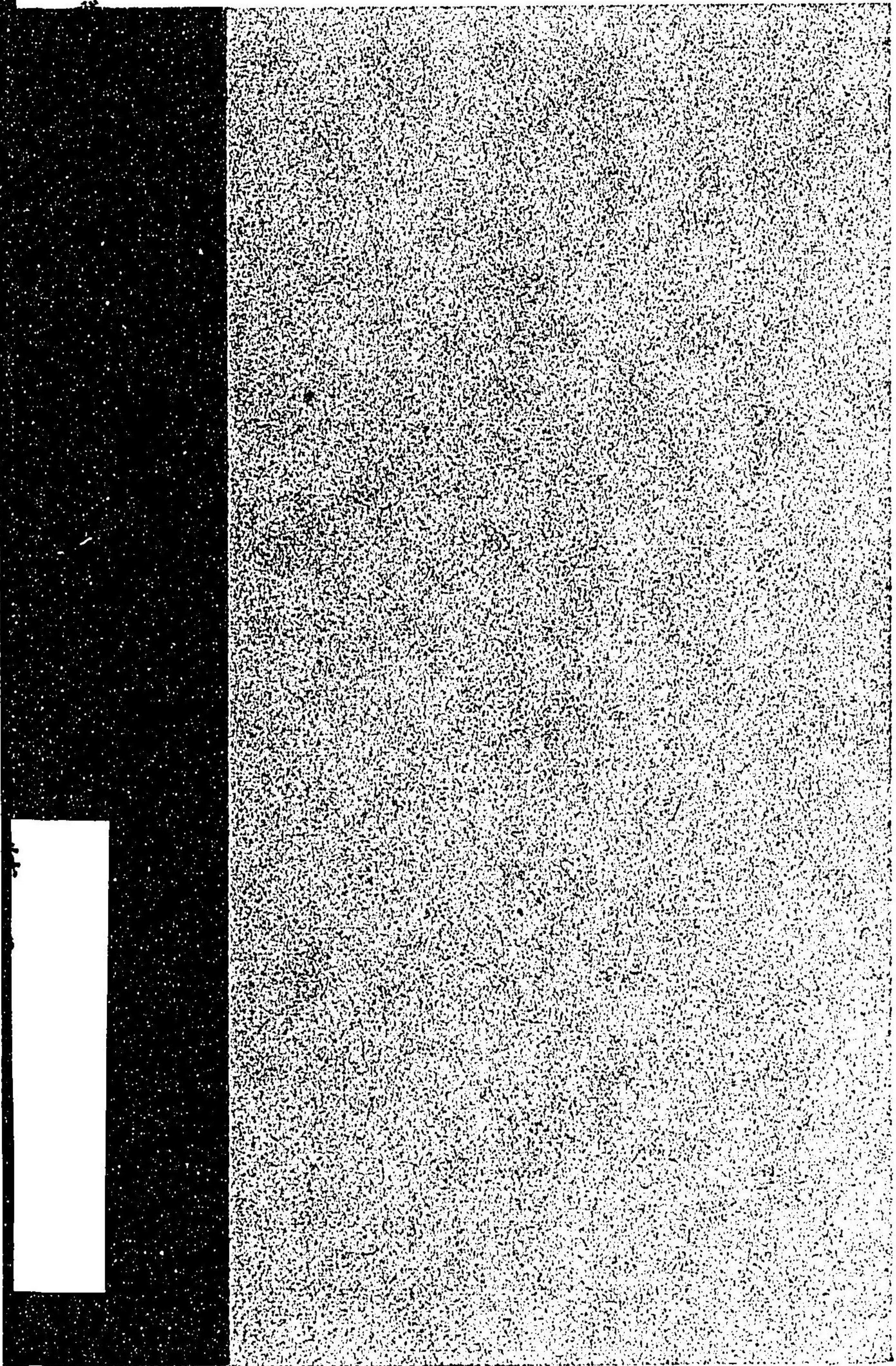


明治二十二年四月四日印刷
 同 二年四月四日出版
 著者兼發行人 澤久次郎
 日本橋區井町五番地
 印刷人 藤本也
 日本橋區吳服町八番地

名のをあげけきを狼藉
 打つて兄弟を勇せんと
 祐成の刀をれて意を
 首びを討れり五郎
 時致の御所の五郎
 後よつて生捕れ
 頼朝公の庭前
 引すへられ自ら
 頼朝公事の始末を
 尋問あり其答明白
 其才智を感じたまひ
 助命せんと仰せらるも兄の
 討れしを歎き助命をうけず依て曾我の
 別所二百余町を其母は賜り時致の
 よ於て誅せらるる年廿五あり後曾我兩社荒
 神と崇毎年五月廿八日をもつて祭礼を行ふありと







特52

164

曾我物語

国立国会図書館

092549-000-5

特52-164

曾我物語

沢 久次郎 / 刊

M22

DBP-2230

